

佐佐木幸綱歌集『ほろほろとろとろ』

俵万智  
ほろとろ度

印象的なタイトルは、種田山頭火の『其中日記』から引用された言葉。「(前略)酒がきた、樹明君を招く、それから、ほろほろとろとろどろどろぼろぼろごろとろ」と日記にはある。佐佐木幸綱が酒の歌の愛唱歌としてあげる「大方はおぼろになりて我が目には白き盃一つ残れる 石樽千亦」にも通じる境地だろう。「この歌集ぐらいたら、私の短歌には、自然体、あるがままの表現が多くなったように感じる。」とあとがきに記されているように、一冊の歌風というか作歌姿勢を象徴する語ともなっている。それは、形式を日常からの離陸の乗り物とするのではなく、日常のなかに形式を探り、身を委ねる方法だ。作歌という行為が日常となって久しい作者だからこそできることでもあるだろう。

とはいえ、たとえば巻頭歌「首都高の右

側暮れて立ちあがる東京タワーのオレンジの脚」などは、非常に緊張感の高い作だ。夕暮れ時に、自然光と人工の光の力関係が入れ替わるダイナミズム。昼寝していた東京タワーが、むくっと起き上がってくるくらいの迫力で、全然ほろほろとろとろしていいない。

では具体的に、どんな歌が「ほろほろとろとろ度」が高い作といえるのか。

- ・ ふるさとの歌われになしざざざと山の桜を風が捲れり
  - ・ 文学の元氣よかりし日々ありき曼珠沙華の字面の懐かしさにて
  - ・ 自転車に乗れたのだろうか九十六年三か月使いし小さき肉体は
- いずれも、小さな気づきや、ふと心を過ぎった思いが、まず上の二句か三句に宿ったところから始まっている。筆者は学生のころ「ふるさとが東京っていうのは、なんだかつまらない」と佐佐木幸綱が講義で言うのを聞いた。三十年以上前のことだ。風に捲かれてはじめてあらわになる花びらの裏側とは、人が心に持つふるさとのようにも思われる。文学が元氣だったころ、あ

の赤い花は曼珠沙華でなくてはならなかった。ヒガンバナとか狐花とか、絶対だめ。三首目はお母様が亡くなって後の作。まだ知らないことがあったという小さな驚きのうちに、今さら知っても詮無いことであるという悲しみが、じわりと追い打ちをかけてくる。問いがささやかであればあるほど、切ない。

以上のような作は、かなりほろとろ度が高いように見えるが、それでもそれぞれの下の句には、ふとした思いを詩に高める技巧がさりりと施されている。

- ・ 掌の上に川をながして小さな筏の行方 見ている目つき
  - ・ 誰か生きて生きるかぎりは何年も冷やし続ける介護するように
- 一首目はケータイを目で追う人を、二首目は事故を起こした原発を、詠んだもの。ほろとろではないが、平易な言葉による比喩の鮮やかさが、印象に残る。
- 巻末には文化交流使としてヨーロッパを巡った折の大連作が二つ。「ライン川の岸の青草食う羊三百ほどか 三百の白」など、絵画的、映像的な秀歌が多い。